

コメントC：花島健司（小学校から見た日本語教育と国語教育）

小学校から見た日本語教育と国語教育

花島 小学校から見た日本語教育と国語教育というとても大きなタイトルをいただいたのですが、小学校で外国から来た子どもたちに、ことばの指導をしながら感じてきたことを、お話ししたいと思います。

レジュメに最初に書きました「ことばは教室での学習活動の根幹」はいろいろな先生方がおっしゃっていることであります。学校生活の全てが、ことばを教える教育の場なのだ、という認識が非常に重要なところだと思っております。そして、そのことばを通じて子どもたちは毎日成長していきますので、ことばの大切さは改めて言うまでもないものであると思えます。

「日本語教育と国語教育」ですが、私のような立場の、小学校の日本語指導担当の先生たちには、違いという点が強く認識されているように思います。「日本語を話せない子どもには日本語教育ね。話せるようになったら国語教育ね。」や「母語を身につけるのが国語教育、第二言語として覚えていくのが日本語教育。」などということばを研修会などの集まりでもよく聞きます。以前に、小学校で外国人児童を受け入れた初期の頃、手探りで指導をしていた反省もあるのだらうと思えます。

しかし、現在は、いわゆる初期のまったく日本語ができない段階を乗り越えた子どもたちが、「話是可以のに、作文が書けない。」「日常会話にはまったく問題がないのに、教科の学習が全然できない。」というつまずきが大きな課題として見られるようになってきました。そこで、日本語指導の中で、題材を各教科から取り上げたり、国語や各教科の指導の工夫を取り入れたりすることを、試みてみました。

いろいろ試してみますと、外国から来た子どもたちがことばを覚えていく段階というのは、国語の学習指導要領にあるように、事柄の順序を踏まえてとか、中心点を明らかにしてなどと、日本の子どもが学習していく順序のようにできるようになっていくことが多いことに気がつきました。これはやはり、長年国語教育で培われてきた発達段階に応じた指導の工夫が使えるのではないかと思い、現在少しずつですが効果を上げています。もちろん、日本の子どもたちとそのまま同じものを使うことは、難しい面があります。そこで、一人一人の子どもの獲得している語彙や文型や漢字を考慮して、易しく言い換えたり、書き換える手だては必要です。それぞれの子どもがつまずいた段階に合わせた指導を工夫しているところです。

日本語教育と国語教育はどう違うのか、どこが同じなのか、連携をどうとっていくか、などよく言われていますが、実際の現場におります私の立場では、とにかく困っている子ども、つまずいている子どもをどう支援したらいいか。教科の枠組みや、教科書にとらわれず、目の前にいる子どもを中心に、少しでもつまずきを乗り越えることができる手だてがあれば、何でも参考にしたいというのが、正直な気持ちです。そして、その中の実践から、一般化できる有意な情報が得られるのではないかと考えています。

相手に分かりやすく伝える能力

最後に、一つの実例を挙げたいのですが、先日、6年ほど前に小学5年生で中国より来日した卒業生と話をしたときに、「先生の日本語少し違うね、他の日本人と違うね。」と言われました。どういうことかなと思ってよく聞いてみたのですが、ここで西川さんが提案されている、「日本語の先生の話す日本語はわかりやすいけれども、普通の日本人が話す日本語はわかりにくい。」ということのようです。そこで、「どうしてなのだろうね。」と卒業生と続けて話をしたのですが、「でも先生、私が話す中国語も、中国語ができる日本人に、『あなたの中国語はわかりやすいね。』と言われるんだ。」と話していました。これが果たして第二言語を習得した経験からなのか、どこに原因があるのか、まだわかりません。しかし、自分の母語や文化を客観的に捉え、そしてそれを持たない人に対して、わかりやすく伝える能力は、これからのことばの教育や国語教育には、特に求められていくのではないのでしょうか。その方法は、第二言語を身につけた子どもたちの経験の中にも、何か役立つ点があるのではないのでしょうか。人にわかりやすい話し方で話をする、わかりやすい語彙の中で話をするということが、これから求められていくことではないかと思えます。